

統合失調症 vs.自閉スペクトラム症
—初期統合失調症論から見た、症候ならびに成因の共通と差異—

医療法人原会 原病院
中安信夫

ICD-11において「2. 統合失調症またはその他の一次性精神症群」、「1. 神経発達症群」と大分類を分けて区分されている統合失調症と自閉スペクトラム症に関して、症候ならびに成因の共通と差異を論じ、両者が鑑別診断においても、また病態理解においても意外と近縁であることを示す。各々の典型（統合失調症の極期ならびに旧の自閉症）を見る限りにおいては両者は隔絶したものと言わざるを得ないが、その比較において演者がここで対比するのは統合失調症に関してはその初期である初期統合失調症（中安）であり、自閉スペクトラム症に関してはその軽症型で言語陳述が可能な旧のアスペルガー症候群であって、その切り口ないしアプローチの仕方は初期統合失調症の症候論に依ったものである。

結論を述べるならば、症候論に関しては初期統合失調症もアスペルガー症候群も体験症状はほぼ同一と思われるものの、唯一異なるのは前者においてはその症候の中に「他者」が出現する緊迫困惑気分ないし対他緊張とその関連症状の3種（緊迫困惑気分ないし対他緊張、漠とした被注察感ないし者意識性、面前他者に関する注察・被害念慮）が頻度高く認められることに対し、後者にはそれらがまったく欠けていることである。また成因論に関しては前者は状況意味認知の後天性・一過性・可逆的失調（状況意味失認）であるのに対し、後者は状況意味認知の先天性・永続的・不可逆的未発達であるということである。